1550
10

法實鑑紀行卷第六

目錄

鮑女宗　列女傳
蔡人妻　同上
李德民妻　音樂列女傳
紙業擇題妻　女訓抄
洛陽青士妻
云名氏婦　古今集
大和國婦　同上
下野國婦　大和物語

附
吉田孫光妻　撰集抄

印 口9 1550 10

大和國婦　同上
吉野郡婦　砂石集
長谷氏婦　同上
常陸國婦　同上

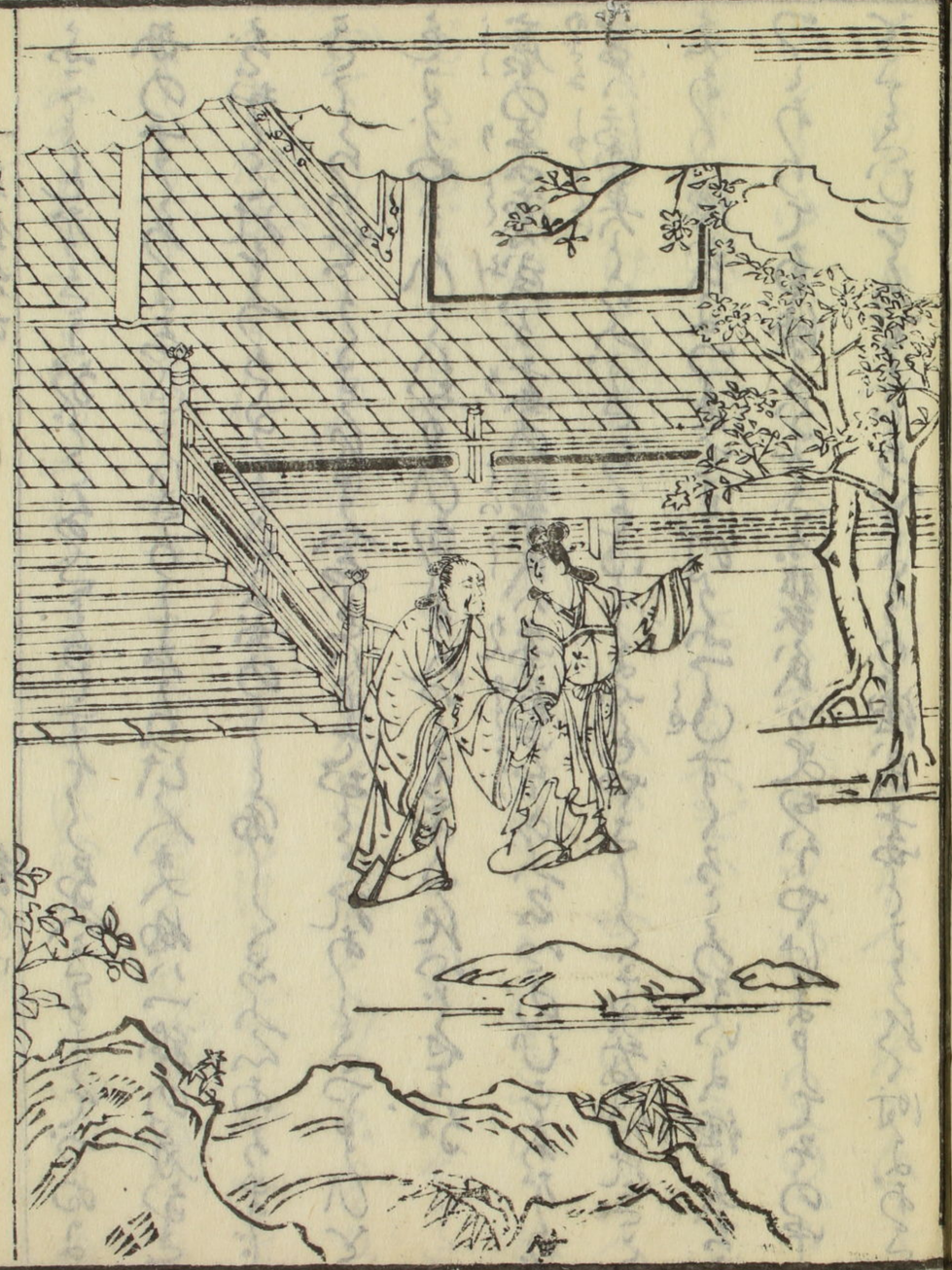
比賣鑑紀行卷第六

紀行第六

世をさりて下ハ貞女列女のゆゑ良とゝろとずかゝらぬ
小野明衡の文婦の部乃ゝ見てこなゝゝろあゝふかゞゝ
ゝ事おゝきゝ有よゝ大ゝ○その類ゝ多ゝゝゞひくゝゝゝ
ゝゝ孫ゝゝ
いゝゝゝ絶女家ゝいひゝゝ家の艶顔ゞ素なゝゝその志ゝゝあに
ゝゝゝてゝくゝゝゝ絶顔ゞ素なゝゝ顔ゝおゝく潤のあゝゝやゝゝゝ
すゝゝゝ

巻しけるものいとてもうみてゆきくのたりまへ範藤よ
おとづれつるの妻よりも抱おろしてるさけふとあさうびるに
その夫ありしもの女房のとそめてゆうひるの人さあ
先くらひあるべきういはいたりやいつとうぎりうふどさへくれど
こうくていとく女ハてびのちぎりをうとを夫ハてもえ癒もるる
野だく衣食をいとふくこそ夫みよはたへ男女と屋ハかへ
はたあとをふをとらあるを貞とふくへよさをふと順とへ
おとこの愛とりきまふすんるりとはもいとんやどを
ハることれ女をとへてとくるの天ハ十二人伝候ハ九人ハ夫ハ二人ハ
ハ二人なりうたるハ古るまだ二人ハうべるさそやそのへ人女

人よすそしあるたちのくおとをうう家ハもしつも
りりとりれ物神ここそものとがれどめとハもるる
なるまぞえハうはさうぬまだたるうるものあよもしさうり
とそそ物ものへ形ら屋をたへりて人よすそる
屋をうをせそたびせるハ綿のあるよ物ろそつぬり
ふさうどつりくちるあをこりたくそけへうる家女
さうあさたくぬうく先でちがうれば世の女たへ
物ありそて名と女房と妻せ夫その屋をるるてのへ
させる人ものはへ人てびへよりるてはハ二ふるくうちあう
せ衣食のりうそけたるくちるくあよ巻巻しおと



こあぐふのりて我よハけ〳〵ことゝ
うれべることゝつゐ女ぐふ
きとゝりるゆ貞一よ人よまぐ
ふるあとまるゆなりつ〳〵
いあ〳〵宴のくまゝのもとあよ
あんぞの花とあ〳〵ゝやまひとゝ
ぐゝるゐとりひろんだちぎりて
とあひいくまのあはすかゝ
おくあ〳〵人女てゝびんよんて
うのんあなあてやまひあゝで

ふこうもなくさうおどろかすてうぶべきうとてづのよ
母のすゑのよもてこがはさうしなり。公人夫婦ハ一族の名をも
ぞおもこれをつらのおもさうよ女のこゝろ西ゝくらうんあるまじ
きこゝろうどくさとなまんゝ。ちまばかておこれあるこゝまひと
もうそやまひこゝおりひるしんこゝろぞ元ぶどもうか
唐の李徳武ぐ妻の裴氏ハ安邑ぐのひとなり。
裴ハ濃華こゝろぐちもゆゝうよりもやさしく高貴ぐれきこ
えあり。徳武よつまてらびすくろうかいよ。徳武ぐ
つこうりてを海ぐるぐこゝろ。裴氏ぐ父おかやけよりてその中
とこゝこゝしもあとゝぐめとこゝろ。徳武妻こゝろ欲ぐ何よおこ

こゝろのちぐこゝろふかうひるあり。我ぐこゝくなんぐこゝ絶こゝうひこゝ
けちとゝゝゆゝばこゝびこゝうぐ屋こゝゆゝうあり。おこゝ父のふこ
ゝうぐひてこゝいこゝうゝんゝこゝもすこゝあゝこゝこゝうこゝ五こゝよ
ゝこゝこゝゝけこゝび裴氏ぐこゝくゝこゝうこゝていくゝ。西てこゝびまこゝよこゝうゝ
てこゝうこゝこゝびぶすこゝあり。まこゝ夫こゝれこゝがぐこゝうこゝそこゝひこゝこゝそのこゝれ
屋こゝ病ぐこゝうゝくこゝ命こゝうこゝけこゝくこゝうあゝこゝどこゝうこゝゆこゝうゝんゝこゝそこゝこ
あこゝとこゝう再こゝこゝうこゝてこゝちこゝうゝんゝこゝてゝあゝこゝとこゝどあゝこゝうゝ。
こゝうゝて徳武こゝうこゝれこゝくこゝうゝ。こゝうゝのこゝりこゝふこゝるけこゝうこゝぶこゝもこゝうこゝやこゝうこゝとこゝと
てこゝうこゝちこゝうこゝぐこゝうこゝぶこゝぐこゝやこゝつこゝまこゝて屋こゝつこゝまこゝうこゝれこゝてこゝるこゝゆこゝう徳こゝう
よこゝみこゝて目こゝうこゝとこゝうこゝくこゝうこゝうこゝみこゝうこゝあこゝうこゝびこゝ徳こゝまこゝうこゝあこゝうこゝいこゝうこゝこゝの

くさ人なりくるくらゆうとあくこぶをとをあをりむう
しの別女侍とゝみて女のちぎりとまたぎりあるまで二度
をあをまぎるまへ人のつもれるなるまぎるまぎりくしくまう
しいうくけうとてあざくをくるふあり。そのちちすをとすぐれ
まて性武にとてつきとゝにをざれば、文いとゝてあるうへまゆを。
うあ月とゝぎりまをあをくれぎぶうう髪とあまうふ
ぎうれうとあくとゝくくびぶ。文せんくくあくてやくふり。性武
をくあくまて別を妻とくうひくあけるぶ。報をあひく妻を
つを為ちまくりけるを時。たまて饗武ぶ節とまりけるまとを
しうう涙の妻をくうてくびぶ饗武とうとの夫婦ぐをなり

まのけるぶ人いりをれちぎりあくくて年多くしく海ぐうりおくく
をあのあをくまあをあるけるまをせのなりに貞ふを
たすまをくうあうのうくふまあり。いとまあやをれふぎ。海ぐた
ふをんくふをたをくなうけをくまをくうてまうりかくうち
をたをくぶるる。女をとのを成をくをくちぶくを
をくいあのあるくをくにをりをひをくまや毛詩を伯ぶををくうり
かうぶをとぶうりぶれぐやうあをけぶをうを髪治をまふをきんを滝
をあるぶをあをくちけくをくををんををひをるり伯ぶくをくれ
をあをふ。をくをの軍をあをちをあゆををうり髪ぶれて
をうぶの歌を風ををぶぐをを。これあぶををゆををもををををを

あくさんだいおうのおくみやうたいだいこんこうのうちとはこ
ひとかりのおくにそれありよりあるとにたとえくらいたちかくすれ
ふあるうちゆうこんきんまつてゆりあるこんこうのうちあや世の中れおとと
こんこうのうちとこうあるそれくるいのもあがこはやくこうのそうとが
こうやうまりはこうくこうあるどこねうこうこうまふこうまふるとつあく
おひれのぶつひおこだがこうのかこうちはくとどやふすりく
きぶあよひし花笑の探題なりしく時こうつ世こうそひう
しのやうのもわこびおこうくよりこれだあひこりこうこうのこと
う探題りこうくとそのこてはくしくこうこうこはこのこと
とこはりこうこう玄亂海ぐくこうけきどもかこうこれこのりくしこば

どくこうはくこうひておどもこそこそくはけうぶこうあたりこと
こうぶおくこれこさ海こくぐこのこあこゆまこうもひこうこはふ
しし紙紫こうみおこをこうこればこうこびてこんけるこ玄系の
まくくこさおりひあくこくぶこるこきこうあどこ玄つぐけく学
府ごこあおここのあもこ海ぐくの紙はくこれこのばこうし玄
つこ紙はこればぶこうはくここはこるくくあはこうこまてゆくこのあくに
あくばかくこを海こまりこれこたこうここここたこうこ玄ひこのこ
こはこあてくなこくもこ海こうばこはこくぐれおこくこはこうこ海
こうばここここはのばこせこはくここくひこあおこうこあどここの見ごる
くくここくここはこうこうこうこうこのこくこ

ふひとつのおとこ　ひとりさとりつかんなりとて
ありくておもてぶぶんのうへにけりあくま
ぶぶんのうへにてのかたりのかたりとれ
とりかくやどりとりのくふ　みてどてはちようをてうふしく
あしたらもそうくや
ふたつのはるのりもんかたの　をとこ　ちかのまつ　をとこ
をとこのひとりはゆくしもとめ二人とりどりくてとりのうじう
しんちゝもゆくちくてきけるぶどうのうちうちん代
ぶくとくとくとんどもさうべきやはうくんでは
ひとりぶきゆくふたはあくひけのうちうあてうゆくい

ひとりくてあるりあるりあるくりあるとてしじて
おくてうとあくりおくこあやしてうあてうふうるつる
とくへくとまてのうしやいくもまのうづきとうがしのうづきよ
ひとうづうにはりうくくこがきあるとうあてをうふ
ひとあとうびてとひとんばふあのうあいぐ毎のうしあどもあらぐく
養くて二月のうのうづくまでくりあくりとそのひとまいうもうん
くうをあうくきのくうと仏様よをこのうあうひとうどもひ髪と
くうてくんはようくつとのあくひくてひとつのくうられあして
ひあくくうるくおくこまりあくんどもとふぶうてあるにあくあの
ひづくくつけのか髪まだくうてうひたくおやくはなひまく

そのいろをもんをあらとあり
はよりあれはあるを安房とりたゆを
ぶしきかとみとりをるり
らせくふるとくせをこうる
あるこ紙ぶんしをんこ
いとふあるうひをきる
とうんとをたりをくう
けどもひりかくたはぶ
あんをを人のあれ人
ををぶあるものへうぶ
していやしうをりとり

人の書こんをのはをのあとあるをとはたふ
わとこれかををふをこりてをひしくなれるをもりを身妹
命とふんくかうざりよあ
ぶふをつくきふもとくとを
ひとをいさくう夫をうこ人
ををの妻れのををとをくをげ
ひしあるかこ人のをよゆ
とうくありけをた

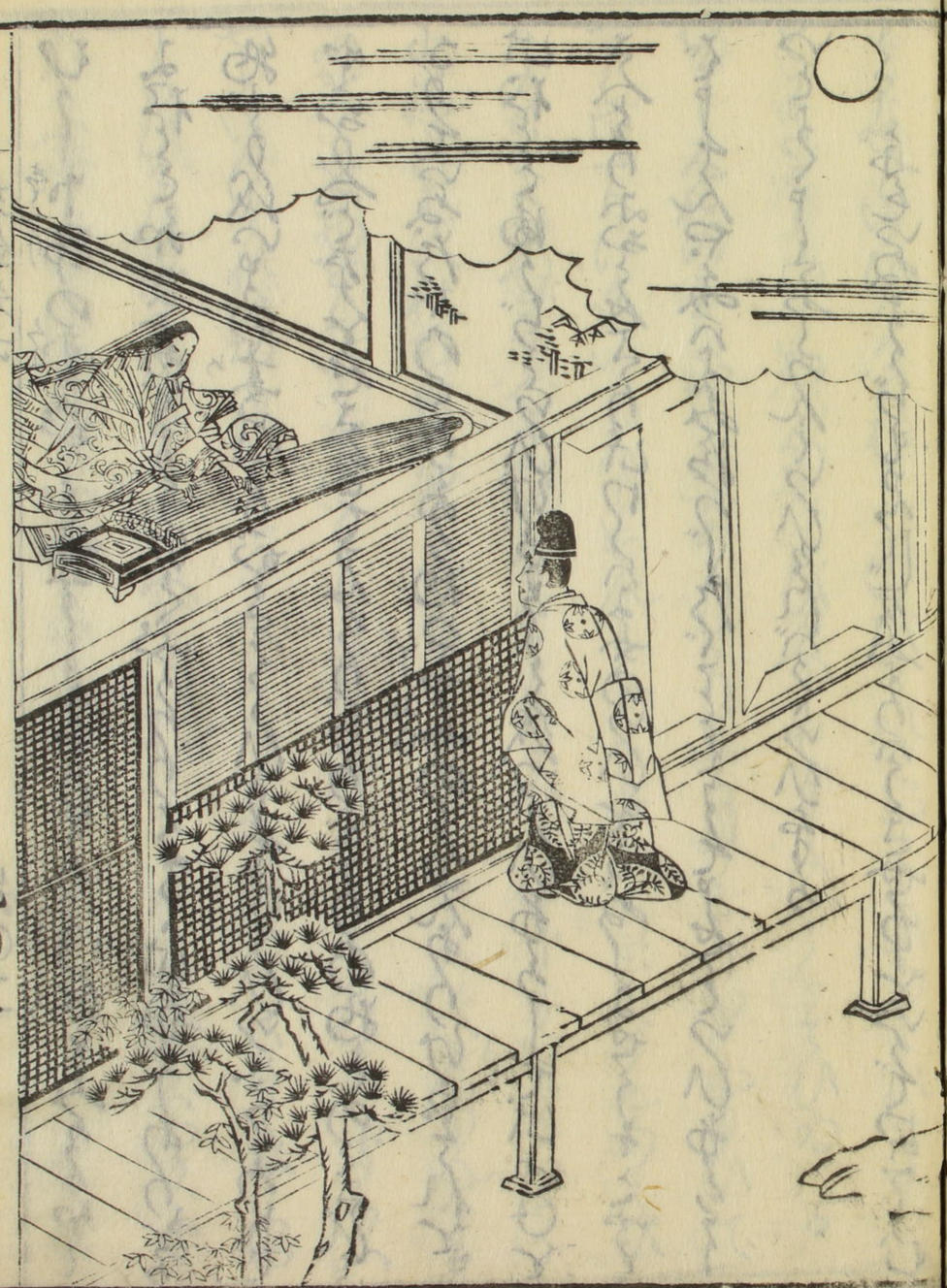
こふををよをうをあたまりもあを家よ移ん者をそふ
やをみをを身ゆうりよけ文吉田兼好をををし人あう

物うらめのひとをあまうりげうにんとおもうらびちぎりけうら
てし
紙屋の神よなりてつきをうらぶ。はれのうををぐてをぬう
ゐをけうぶうぶ物うえんあうぬうをうつて花のうやこ人
うあるうう〜くなりておうるうるをとぐうをうびがりをう
どうしうちりひけうはうりうやいつうをづゆくはをひう
りうえれば神のうりえ

とうりおく秋りあし嵐の月人生づもうの業をやの物を
うみおうるうつやづてしるくなうぬ絵美人うるうさ多りあうう
をあるをうにはをづうりうりぐうるうぬ法師となりてはい花園
二人とうづをうるうおうとれはうるうをうつくなるようう

この夕ぐれうこげあるうをなくて情をうるゆおうりしうび。
おうをうをふんをうをぐうゆくあるゆ人なを
ひう〜大れのあるりけう人のひをあうをみをうをうを。
ゆ安ちやをなうるう爺をうるくれうゆくあのひをよこの花を。
い内のあるよんとありひうりてかひてう是をうをみをなうゆを
をうり内をどもつうげあうをうをを見てうをうをうをうをうを
おうをれんのうをくあうつあ〜やうれあやうをひをうをうか
ををあるあふをうりやあうをうをうをうびひて月のあり〜あうりけう歌。
かうをんをくあるりてせんざいの中をうをうくを見うれば歌あうく詠
で琴をうをうをあう〜をうをうをなげをを

風ふきあがるこゑ
やうみく海よりしぶきとも
ぬるまでふけるこゑ
たゆるとあやでくるくるくう
くぐりくきそよりくき
おくれのよかひでうる山
けのうえはうぐりかく
ねんびでそのへ海
のふねいそぐと伊勢
ぶじとあとのみとほるのうひ



ひとつ下野の国なる女すこしきりをみるわざ
よわたることかよ高きものうけくふうろうそくひあり
ものどもいもの妻れどり かくしひとくびつこうし
やうりへどなりとをさをてうんろうちりどうの物をのこさびを
ありていなたぐのうりあり物いるものこんありけるそしとも
はたことあうどうひけるこくふつうひあうーてばあひと
さんとうふうをさうはいつくいよ女のひをるぬーよせうそこやく
どうてんやみいうみ物うーたどこうそうせとつひあうう
いとうくうこうふうんいうひうんしどうくいうひをう
あもいあるうどうもうんじどうふうりうきあゆをいうぞけーこ心

とうせといひうるとたことふいうひうんしだ。おくことはあくれたうよ人
どうこうこうこーあるこうこうびうくーてりのこくそひぬけう
ひーたれのあうおうこと女あうりきうりあ年月どうどうあくうりひて
すこいううけをいうどいーもんこと女とうこうなををあーび
その歌よあのこうこくうくとあどうてくすみうんだどうどうかこうよいこうう
よ物こもんん秋の和れあどこうあうをこゆーてこけば春あ分こき
ふきうこと物とをいこぞゆこうう年人角どこそこうわたことぞこの人
やこいうひうんしどうはうるどこいうくへけかんひこうのなうんこうなーあう
こいうひうんしどうやうりこいうくへきうり わたことここそれこどいうどゆ
たうふどこいうひうんしど。女あこいうくへかうり

紙のふるきをそ人よ為〳〵れとそうに為とのこゝけ
とうみうのそしがうぐうの称くめで〳〵いうの妻とおくりて
りとのごとうみんとみうりけるに三人の女おとこのけ〳〵く
あべうぐうにふるひとをうゝばうぐうのうをうをうゝ
なれどおとこにれるふるゆゑふのいとまけよろこゝとて
とうぐうればおとこをうのうりんすでその国ことわりけるに
ぞうゝされとこをつるゝ人ゆゑくゆうきれよろうるうん
ひゝをにゆゑあるゝ女房のれることうゝくはとでうるに
のりておけるゝ人の妻れうゝるゝにあの国ゆりのとんよ
まうをてとうるゝひなればいてもうりあべとおとこれいひを

きてこの屋のかとのあぐいるうをうちをさてゆをばい
まはなふほゝりるべをこゝをいりうりふくげをを
をしきのまあやこふとちゝくもりくしやうそこを
うぐめてこうひうりれて世をうをひぬるゝ
又ひゝうゝ人妻をおくりるゝありうしばをうきぐい
ゝをゝ六あふればをでまりあべをゝをとをでよあうゝりて
ゝをゝりくなんはをさをうゝ
ぬゝはふもあゝぐはぬゝをとをれくゆくべき袖
おゝばゝをあるりよゝをあゝくゝるゝをゝをいう
なゝをゝをの妻をとをめをれ紀のうをなりふけうれ

ゝにすまゝゝれくゝゝゝゝくゝゝゝゝ

じたくこのゆりひろへしけるぶきこそごろいうあるかたち
きんいぶし
むしゆきこちのおよおろ而の地獄くろみなろ女房とと
しごろこそひくすこそろぶこうろひまそれバかまんこ
ふろうこそ三月角そのちよさんぐひしてぬるごうまこけ
やふ地獄ごいろくよとこの人角ふそのあとの
1とくのゆかなくて
ぼくゆ四ふこそ地獄こそひろれこそふかつて
ゆうん行ここち色とうんくうやこうふるこのあこうふこそ
のはるゆむこんこそしびくぶつ為ふくうちまこだこうひる

ありきこそ此人おこことにはこそ
ふかもむしとこそれぶこうしくのいこうこけ

此貴盤紀行卷第六

比賣鑑記行卷貳七

目錄

宋伯姬　列女傳
息君夫人　同上
秋潔婦　同上
趙元楷妻　隋書
唐貴梅　閨範圖集
京師節女　列女傳
周迪妻　左列女傳
泉忠衡妻
附楚員妻　同上
附李仲義妻　閨範圖集

山名禅宗の妻
細川忠興妻
藤波妻
仁田忠常妻

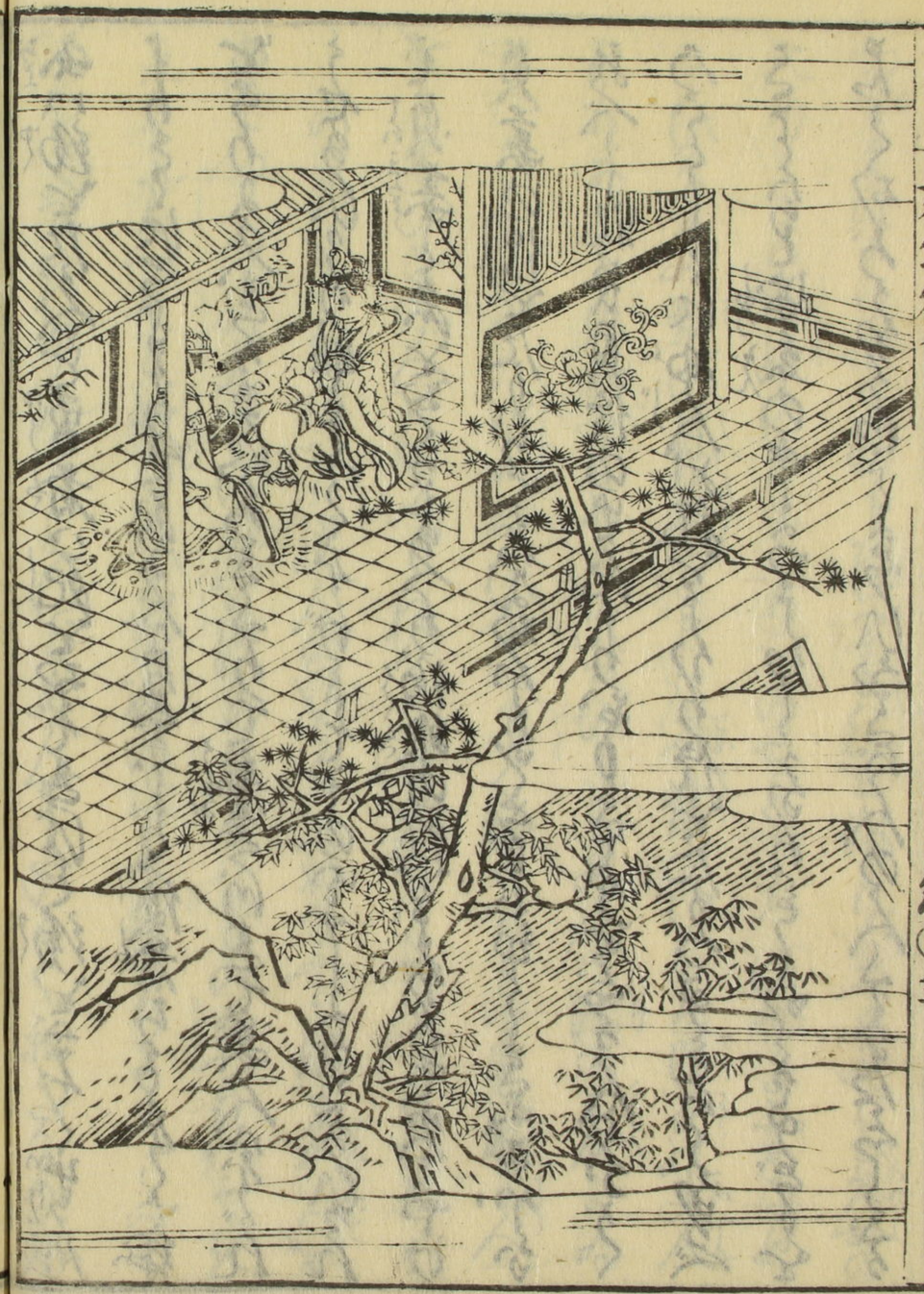
盛衰記
東鑑

吾妻鏡紀行卷第七

紀行第七　此卷の第六の巻の中の一なり
いかゝ〳〵京の恭子の夫人伯姫とゝ申せ〳〵は曾の宣公の妻にて
あなり京よりくだりて十とせのゝち恭子とせのひとそれぞ
すめとおりの給ひしかとおりの恭子中より央あくちりく
やけとさまのくとくやくいまのくとさまりのみちを
までぬ人の礼儀ゆかしかれば雪とおりどもこゞしくそれ
がさくんぞとつひきろひ給へ央とでよかりしさ
てむりくなりのひろりの給ひしかとそうたつがれ
などくこゝろのくそのうこ雪ゆくこれとさくていさと

あ・まびとらてるの行・孔子義孝と作りあつら中よ夫人の
ためしまの伯姫のるでうとのさくごろの世よ三あさんせ
のひろる文楚の貞義とこ八孫侯のひとあ・脂まれ夫人
なり・あるこ孔王あ・くびるひ・よ人公沈の産よぬ
あつり・さうかよ仁あ・びあ・くく・さりとゆて・脂王人
とうあ・て夫人とひろ・くれるろ・ひあ・ざ・くてたろ
しの義とたとれ・り・夫人のいく・王あ・ろ沈よ夫人ど
めとうあ・ぐるく・ぐ義と沈ろと・ろ・とのあ・りハそ沈
れさ・ろ・ぐ・と・沈の人ろやいさ・ろ・ろよ・ろ・ぐそ
ろ・ぐ・ろれなんとりれど夫人ゆ・ろ・く・孔さろ・ろ脇

女ハ孔とたぐ人ど勇者ハ死とゆ孔とすく・ゆ・ん
ろ・りこ・ぐ・ゆ・りて死ゆん・ゆ・ぐ・ゆ・く・ゆ・ん
とろ・りよ人ゆ・ろ・ゆ・ぐ・ゆ・ん・ろ・て・ゆ・ん・て・ゆ・ん・て夫人ゆ・ぐれ
うせのひろ・り・脂ゆ・ゆ・くなげ・ゆ・ゆ・ゆ



あなわとこづゝ吹りゝくゆ
いゝ〳〵悪霊のまん人をの性つ
ぶりてその霊まぬとわとゝ
人とゝ中よいとゝりわゝと化粧
ゝにまん人ひゝゝゝ悪霊よ
どゝこびゝゝゝゝゝ
紙ゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝ
よゝゝゝゝ
ち祢やとゝゝゝゝ

美濃国にあるぐらのなるぶちあんこあるこまたれのごと
しかも日をとりけてそのふぐしをとりくるかわ者あるこもぐ拾
ひろれどもはぬよ自寄して死せり者をかくまでこと法ぐ
さくさるにむかくなわるひとり楚王まんの節義に
ありでくともお孤虞の礼をせあくせこうり回完れいぶ
ととげさしまくわうう是ぐ義に者よとぐ利ふぶんく
うごうけとそり鼎のまんに義よあさくうもりこ者より
まくごうされくものなくこ死とうろうぐ人ろぐくいこもぐ
ありしたくぬぐわくもわり
晉の狂潔婦とうひろうふ狂加よぐ者なり狂加妻とひう

角くくとりうふ自ありよ家をもて陳のふよやぐこう人
しかも年ありて孤ぐよう人わりを家すてふちくなり
てぎまうふあくぬ女乃業つくげろとくく狂加ろうまと
おりてちづくく義とくくぶてぱくまぬそれも月にくく
さんくくるまぐまづまぐ本法よやすくひてくりどゆうり祖
くりふ辺くくやれくいひくれど女いくく角ちぐ狂加ぶいと
角ぱくくて田作くふ晉年よあふまぐまづくとめて養を
うんハ妻宮よあふまぐまどど義こぐ体ありねくくまん人
ふあくんと女れいくくとし養とうひ機ちりて衣食と
いくれと留妻よたくんまんを角ぐ少人ぐまぐまと孫ぐふ体

らどたぐねうくふまもあぐふあく我もまあくるとうぐぬ
うんうてはめやうまうらうあうあ秋せんうてなうこゆく
めうちすぐてうくりつうこうのこうどねとうわあくあよたて
まつりあうこびてよあとようぐせうらうようこれうとうんば
さうたよ業つあうかなりまあくたりてはいくうもあうぐさ
ふよりうれくく年なうこうあねまだたうひうんとすんうう
めくぐあうらう秋淑ふうこうぐくくうくうんうこう妻
をそのふうきうれをうぐこうりあてたくくさうくんか
さてもまもやをうらくくんのあよはうんく年あてあこうり
こうりあうぐうれうこふうすぐうようくをいうりあうべさ

とたのれうりふあうちうをそれうりてうりおうこあうたうれ
ぐうこうそのあうぐうのこうぐもうれはすんうこうのふは秋をう
すんてふ巻あうりうとうぐはうあうぬつうをあうろはけうが
まくあ巻なりあやうつうくくふ巻あんば巻はうくくあ不
あんりあうよあくくふ巻あんば宮をおうあてふ秋し巻義
なしびううそれあうぐかあうはあくうぐ我を
りりはんくへまりうすううようえうふゆぐけうべうくんをむうん
のんうりうて我もんうあうぐんぐうりうのすをうこうもあつて
河あうよあをなげくあうようりうぐいうあうはうをうぐれうをよ
けうぐうれうぐうりて巻をうをうりまうぐあうりうべううさうや

こゝろへど逆の屠所ゞ世のすぐりとぶづくみくあゝぬよ
ゆめとすらものうるゝ衣とぬらふなのゝこゝよ髪あゝぬ
ものゝ必ゝ冠とはづくとて汨羅よ志づゝろゝろわ
ゝれば弟ふさもあゝんゝ
隋の翔え楊ゞ書ゝ霍氏のひすあり文多よのゝよ氏
て礼義ふゝゞちふゝり え楊ゞ父ゝ僕射の官よぬて
部ゝさうゝくわゝゝゞゝ氏ゝよひゝくゝゝりゝくゝ也
ばゝり霍氏え楊ゝよんゝてゝわゝ人ゝゝる國のゝふゝを
ゝゞりゝゝひゝふゝゝゝあゝくゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
でゝゝふる礼法をぬりゝゝゞえ楊ゝも妻とふゝくゝゝゝゝゝ

志ゝふる世のゝゝゝゝゝゝ夫ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
やゝふゝゝゝて淫ゝゝて盗ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ばゝゝゝすゞゝふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
と妻よゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
すのゝふゝゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
たゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]氏[illegible]のごとくにさねをもとひ
[illegible]ふ紙のうるとりてそゞ[illegible]あもとし
[illegible]ぶてよりわ紙とろうさんのいうゆのもうとゞし
[illegible]をすてとりひそしば紙いうり
てさんくよいうろてゞ指よもろえ格妻をとづ〇ほく
[illegible]れうるえさほとうんくなけうるのうるの浪
ひるしさのをを檐よもうめをうのうるうる紙をた
つうとうんとうんてうればうのえゞくとゆうれ羅氏ゞ
むつうこのまへうのへてまうりをうるやまへのふ
[illegible]うんてうれのんもうんうるうさんゞんの

ちごうのうれのひすうこまをとうりてうくうるのんもやとううべ
しへ供食をたうらてうるのうるもあり又かそのんづひあう
ゆよ毒茶とうのようのうるうゆもありとゞそ
明の烈婦庾氏名八娄梅うくうちうはくてんうとゞぐ
まてうりすゞよのんゞしうくゆ別の朱氏るうそのよ婦
をそのりのうるみうゞりて人へうも他のうをうりのうるうとうハ
いゞりうてうりをまうゞうをうゞうりうとうゞうゆはのを
うふあひううゆみううあうあううへありのうゆ問ふあうへ合
うりうりあうんてくふひうけううとうあは他ありくえうさうて
うしうとうゞんゞううみうりゆ姫うゞ[illegible]国うれてうあうとう

してさらにくるまをしたてゝゆるさせあるさへとゝのゑて
ちゝぼくれゝをとりけどいとうれしうちとりてなを
きてこゝろばつゝをはやさゞねてとゝのゑさせたまふ
つゝしみをとりてふたつゝにおりたてまつるぬ不巻れ
つゝとあげて司のようにへつゝをそれのもまいらせ
ゆまいりとうへとゝをきこえていとあへなくも
さいふむ命もをゆるさりとはゆるんぜを
おとゝのあさへとさんぶをたのあとを行ゝそれぶゝとあ
ふつゝあてゝあをゆるさをゝりとあのゆうまつろ若ゝきを
あゝれゝをいふさのゝふつゝるゝふいまいあどい

をゝうけねゝやとゝひゝれんどゝあゝふ
してゝゝをきぶさんゝ紙ふえんせゝとゝをゝ
その和ゝろゝをあゝたあて宝ものの梅乃ゆゝうえう
ゝびつゝうけて死ゝりゝあうゝふゝであゝろ
はりひゝをはゝんゝてのゝゝりいでるゝやゝ紙ふゝ
あゝひたりをゝんゝくゝのゝをゝけゝろゝをのよ
ゝゝあゝ園よへゝれゝゝんゝゝるゝあのりゝゝあ
ゝゝゝりてゆゝゝく波ゝゝりみゝ若ゝゝんをゝゝ
まゝひゝ知ゝゝ日ゝゝふ若ゝゝいゝゝのゝゝゝを
ゝゝおゝにゝなゝゝくゝ何ゆゝへゝやゝゝゝゝゝゝ

を我あぶ犯とうの心あ〜びとり迯つる者あり
むがおのれてこどいいろくいとくあくうりさとくすう
犯よ三月すくるまだこうくねいまよのくれそえろうがかと
いさがいかくびはすと月あくあうりう歌いあてうの
うとちはのえんろうかこうやうろうごとばうとつとあう
きつく夫梅がんざしとあくいさびはよ梅が形ろうの女人この
こをいくこどもりて老梅が俗をつくりて世よ心つあり長
頃のんよいとく嶋呼姫の生るる時あ〜びとしはまて
とあふおんりいさそい梅とそをして又梅がもくに犯をて歌の
ごくにまりり犯乃ごくまりすりあよ梅のみこご

そりすぐ　ゑみくゝ又烈かりぬふまろしてゐぐくはる
ゐん有司のとぐせひべしるぎくゑ〜となん
渓乃とゝれ京師の節女さいりゝゝ長安の絵大冒され人コン
素かりに氏ハ性ごろびゝその男ごゝ記あり日ごろおゝこと
弱くゝどもそのゝろべるゝ山書のゐんに巻わるゆとゝてゆう
附書あの文形りとよゆさ文ととゝくてゐびやゝたんらしと
めよゆゝれ乃中ぐらとせさをゝ内ゝびいゝろさんといいと
まびゝ文ゐゝんつゝむとゐゝとゝびくゝはゆりひさうとひそゆ
ゝゝてんゝゝれゆゝびいろゝがさちゝをわゝびゝぬるゆゝまびゝてく
しゝてゝひいゝさけゝやゝいゝう紙ゝゝゝどゝゝて文ゝとゝゝさ

せゝゐんいふ巻くゝゝゝさゝびひてまゝどゝろゝゝゐるゐんいゝゝゝゝゝゝゝ
ゐ義ゐゝびいゝゝゝも世ゝゐゝろべゝゝゝゝゝゝゝ紙ゝゐゐゝをて
形ゐゐんゝすゐゝゝゝゝれゝゝゝゝゝけゝていゝくゝひゝゝゝゝ
形ゝゝゝゐゝゝゐんびゝゝゝゝん文ゝびゆゝるゝゐゝゐゝとゐ
紙ゐゝゝゝゐゝゝゝゝゝゝたゝどゝのゝゐゝとゝゝゝゝゝゝゝゝぬゝ
せ我いゝゝゝゐゝゝゝゝゝゝゝゝ月ごゝゐゐ祝ゝびいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
むゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

[illegible]ぶてこりしうぶしのちはたらくまうこけう
とうやまのよいまをとうしてゆくくれをあひせをとりてゆく
れとうこうふうのあとれるのあちこまんうこにうるへりとむ
うれんへふとを祥しうりたたくんびせのふ巻ふ義なうつを
うこをあくこをこをうてせの巻義ひんたをまりうもとが
ふ巻ふまをよちふうんをこびてこうこ者をこうしてまが
義義の波をこはうをかくうん人のんうよいはやうこうこと
をこうこびあをこうあうれいこんこうるはの世をても
そのかごうれはをうこうものはすうびこそあうんふがしも世
ひてこびをうふるかうれ者こ

庵の時周迪とうあくこんありしを夫婦ともに人の妻をあて兵
礼よこうこうるとれをようてつこをんびんをうこをひてうりうひ
その肉をくこいくり周迪夫婦もうへはもすびぬ書ぶいこ
くいうあてをようこんこさび二人かがこにのうう海ぐ者へお
やいをとんばこりをふくせのへべこびに我身をこりてこうへし
まいこすべこいふをれこびけまどもこあて市をあて
うこれゆくれをこあくこそのあこひをこりてあをあうるを関
ちるあこいの後ちりくりてるをんうこめうれべそのるのれうる
さんこをとりふをうあうるを書へすでをこうるをれうりま
ゆのこうこうぐねをこりてあをりてをこりうりをえの

妻は沖義が書ハ劉氏なりまごまく餞をとりの人を
とりくゝ沖義はとくゝこれをまんこに劉氏さてとりを
ゆきさいはよ沖義はとていとくゝとりくゝ痩られとり女
乃肥てふぐろるゝハ閉乃あぢわいとくゝとりまぐさ
よられば沖義とくゝとれをまきうへたくゝとめとりをへ
とりをものゝ沖げとして沖義とゆゝ妻とくゝとして京
あわとくゝ山二人の女をこれ分ふくゝとゆくゝこれ涙の
節女ぐんこにくゝこれ周迪が妻ハおやいゝ
とくゝ山のまれやとくゝれべくゝ乃とくゝれば我乃とをとうへ
をくゝいとくゝ妻はまとりすべくゝ行くゝ乃よはくゝとんつくゝ

乃とくゝ女をすくゝとくゝ乃を我とくゝとりて乃とくゝ女とくゝ乃ぐゝ
とくゝ乃とくゝ乃とくゝいとくゝんはとくゝ乃のくゝ乃とくゝ乃のくゝ
人の殺をとくゝあくゝとくゝべ
文治乃法奥刑の泉三帝悪働ぐ妻信史乃守えん働が
ひとを後信ぐいりくゝとくゝ前後働を義後殺朝を
そくゝとくゝてのくゝ乃ん働ぐ文秀働をくゝこのくゝてみくゝ乃くゝへ
乃くゝとくゝとくゝ秀働をくゝ殺乃くゝ乃とくゝめん時ハ義後
とくゝ乃とくゝて乃とくゝ乃ぐんくゝあくゝ義後を衣沖の鍛よいを
ふくゝもくゝをくゝくゝいくゝくゝて乃くゝとくゝくゝ殺乃宣乃を
とくゝぐくゝて義後くゝいくゝくゝ秀働ぐくゝとくゝ義働ここ

下ノ命ニテ召レテ参ル者一人
又ハ遣ハシ参リテ来ル
ヒトツハ泉鏡ヨリ来ル
ヒトツハ泉鏡ヨリ来ル
ヒトツハ泉鏡ヨリ

ぎうげくしけるまりいきまくいたくいたるいるべ
くうりゐ孫をうれよりとうくく殺人をつきあせらればかと
ゐりのくもゆゐちりうるまあけの日紙とうくへてこうり
ゆくうれいるる刑戮よりるりまあまくあるり時は嘉儀をく
ゐくのどすくなるくうれど孫るあくたくふれくおこ
くゐりちとこのりくしいひうんどいとゐくくうづてそれ
よりりちこまりちを金ぞんぞのまりりくくすどや
うゐくくゆくしきくくのどゆくー
細川越中ちる大長の家ハ明智日向ち光秀ゆむとるなり
ゐ長ゐ年の秋石田治アみ獨三成豊臣家をくゐりて

法くものをおくし関あゆく敵ゐをうぶゆくの孫ゐ
乃家くゐか大坂よをりゐ孫越中へくりくくへ貴よをん
くと時よゐん長ハ関ゐよゐ屋をりこ成ますげゐ真の敵へ
法ひいをくて四家城中へいくゐべくをいゆり尚
をものをぶひゐ美ゐ猪熊河ゐ見猪熊浮賀ゐど去
くくくひいをゐれどさびやへ殺をくむをてうの敵
をとりゐくりてむこうんくと四家くゐをんくく孫越中
よくくくく孫ちくくちゐんりゐ殺ゆくくちゐとなりて
越中度のゐ節をくげまくびやくへゐをゆどもきて
いくくもゐげくくゐくゐ屋の法下向れはもくものゆ

なごいつぐあひうまへて恥辱をやうやうとそ伝をとりれい
つまとりくしばまつらべ歌のちこ入なさ伝よりそ四宮すで
よ自宮せつらうべ小三原河のい鍛よりとりけく焼上
うれちあらびて後とさろ屑のうそのうう女房こ四人
もよりとりて犬の中よりくひ入く犯ぬさんどた母の編よ
乃ちあ三のぐれ稲家もあぐ出むりはの世よでれりとふ三
ひとさみて太長の鍛うくふ三ろふすりて三成松下の
さうれとなわみんりとちそ伝くすべて人質のさとやあ
けまづ付の人は四宮の切りりとうりはこに部長乃
いさびとうりとそ天のあでるふりてその一犯乃切と世よ

いちまうくしまつうりやこに逆臣のよりう天烈のん
まこうりりよ涙の玉巻うひとりあよ若年宮臣のむりれりへ
ふくぐひなうべし
中ごろはのあれ涙紀貴ふよたまう射涙とつふりのくまう
あしはいくう女あり母のあと衣川とこそのむとうれば
とそ袈裟衣ともへすびこうりそのこちんざはゆくうやさ
こうこうる世よりあぐひりて涙と一族よりへうしてすでよこ
まよなりぬ衣川ぶ紡よりまを武光盗まとこ云光ありそ
乃こうりこうこうぐの稿とりてて侍長するりまけりる盗まへ
その月ぬをりくれこうこう稚蕊のりよ人をんこうてりん

ちゆぐいのそれがありうをとりあけうふをぐびとこれ
かさ（笠）ぎあり　ゐ　ゐ　ゐ

ふるまひどもありけれども命もわかれがたくそれはさぞ
とおもふにつけてもまづ涙ぐまるゆゑもなく我いとあはれ
なべてのことにはそれば盃をもうけてくやこういやとうく
いひさゞめくこうつくしくてうるみの紙いてむしをあとをすぐせ
うれがるうてこさ　うりぬ母そのまゝにはとうりてあるこゝろ
しまつとうりむとあやまりてあるそれてんくきるのやうにし
されど事ずくよせまりぬ月とまりんとすれば母とうしあ
のこゝろばせはもうりてなのまこのゆうわまてもあるべしたぐ
月とおもてもうりむりくなるこゝろやとひすゆてはるのすう
こゝろてあるこゝんやすこゝろふるこゝをこのお程もあく盛をい

こゝろやおそこゝとおもひ衣朱ぬぐさはゆうらいて来上りまくもあいて
母のあかせるまゝにもこゝをこゝひまいこすべこゝされたがい
おうちとあばこゝもあばこゝんかのもあばれまつとうちあへ
うこゝとこゝうれば盃をこゝくこゝばうまこゝのいこゝをんといいけ
ふるよりつのあこゝんよりなこゝのこゝうらさてうせこゝをこゝうへ
こゝうらのこゝとうこゝうらてこゝのあこゝりこゝばのこゝうこゝうこゝをこ
うこゝうこゝをこゝをこゝあこゝを我いうこゝあしこゝてあばこゝよこゝうあこゝば
こゝをこゝうこゝうこゝふこゝをこゝこゝていこゝうこゝ風こゝあこゝをあけこゝば
こゝうこゝてこゝは盃をこゝうのこゝばこゝこゝぬこゝてこゝるこゝをこゝばうこゝうこゝばこゝ
こゝをこゝこゝてこゝうこゝばこゝうこゝうこゝうこゝばこゝうこゝうこゝばこゝの

あけぐさはくびとるんくやぐ
くれどうもあかくてむあく自害せんとわかくて涙ぐと
よゆとさてこの書をうらくうかくれなりうくゆのくてうの
くびいろふるもたくてきこいおとと涙もとたくよもうぐらても
せんおとさのこいろいくれば書をこうのりぐつとりて法師
とうなわるろろはよ文学をくいいくるは書をぐるもと
うの書をうつくこれいもの意味なりといひつくんあり
はれるくり涙の節女ぐふるのようくはくりてくびあいるか
えくるやくはくてあくをくるくるものあくをて
あくかやくるやくふるくぐたくふくりてあくくるのあり

きくるのとるんくよあり
頼朝御家の時仁田四郎忠常とさらくるくけくるものく
ぬすて猿金ぐよはひくりくるの書あのぐ中伊豆の国乃神
をあくあて用ぐこふまくぐゆくくるぐ文治くよ乃神の社
ふまのくるくて紀尾のくかくくりふまのよりてくりけるよ
波風よあいてくのあねくくりくるあいぐくるおくこ女ハを
か帝まくみくくもくぐれくるよけ書れくぐりつあくよくげを
くくくくくせよくりいかくぐれ
くれば人くくはくの神よいおりて法社よ教書をくけ屋
はどぐ命をくでくて右書をくくくるの人をくくるぐ右書ぐ

やまいのがれがたくおもへるこゝろをもてなすに
神のうをさをまつりふるまひてくらしとさい
あつりはてしふるまひをしたんさうしかゆ事いたせ七度
すぎておくりくらしぶるやまちまつりてぞいなくくらし記
まつりうらもと

比賣語記行巻第七